履修年度	講義コード	科目名	科目名（英字）	担当者氏名	対象研究科・専攻	学期	単位数	準備学習・事後学習	授業の概要と目的	到達目標	授業内容・【項目順】	授業内容・【内容順】	授業内容・【項目順】	授業内容・【内容順】	授業内容・【項目順】	授業内容・【内容順】	授業内容・【項目順】	授業内容・【内容順】	授業内容・【項目順】	授業内容・【内容順】	授業内容・【項目順】	授業内容・【内容順】	授業内容・【項目順】	授業内容・【内容順】	授業内容・【項目順】	授業内容・【内容順】	授業内容・【項目順】	授業内容・【内容順】	授業内容・【項目順】	授業内容・【内容順】
2017	761001	環境衛生科学特論	Advanced Environmental Hygiene Science	井藤　千裕(ITO　Chihiro),神野　透人(JINNO Hideto),二改俊章(NIKAI　Toshiaki),打矢恵一(UCHIYA　Keiichi),小森由美子(KOMORI　Yumiko),高谷　芳明(TAKAYA　Yoshiaki)	薬学研究科薬学専攻博士課程（4年制）	前期	4.0	学部（または大学院修士課程）における衛生薬学、有機薬化学、微生物学、医薬資源化学、構造解析学、環境科学、免疫学、感染予防学等の基礎知識を身につけていること。	死因第一位のがんの原因として食物など化学物質一般や微生物などの生物的要因が指摘されているように、本特論では環境から摂取する化学物質や環境因子である病原微生物について、それらが内分泌系および神経系、免疫系、幹細胞系などに及ぼす影響という側面から解析して疾病に至るプロセスを化学的・社会的に把握する最先端理論を紹介しながら講義する。	ホメオスタシスのゆらぎを破綻に導く諸要因およびそれを是正する天然物・食品成分等に関して収集した論文情報を科学的かつ論理的に評価できる能力を習得する。	担当：井藤	自然環境からのシーズ分子の探索研究	担当：井藤	天然有機化合物の構造研究の実際（1）	担当：井藤	天然有機化合物の構造研究の実際（2）	担当：井藤	天然有機化合物の構造研究の実際（3）	担当：井藤	天然有機化合物の構造研究の実際（4）	担当：高谷	環境中の化学物質の構造1 構造決定に使われる分析方法、構造決定の流れ	担当：高谷	環境中の化学物質の構造2 構造決定に使われる分析方法、構造決定の流れ	担当：高谷	環境中の化学物質の構造3 構造決定に使われる分析方法、構造決定の流れ	担当：高谷	環境中の化学物質の構造4 構造決定に使われる分析方法、構造決定の流れ	担当：高谷	環境中の化学物質の構造５ 構造決定に使われる分析方法、構造決定の流れ	担当：小森	細菌の薬剤耐性化機序	担当：小森	薬剤耐性菌の疫学、話題の薬剤耐性菌
2017	761002	病態解析科学特論	Advanced Molecular and Cellular Pathogenesis Science	湯川　和典(YUKAWA　Kazunori),小田　彰史(ODA　Akifumi),金田　典雄(KANEDA　Norio),早川　伸樹(HAYAKAWA Nobuki),山田　修平(YAMADA Shuhei),栗本　英治(KURIMOTO　Eiji),豊田　行康(TOYODA　Yukiyasu),村田　富保(MURATA　Tomiyasu)	薬学研究科薬学専攻博士課程（4年制）	前期	4.0	学部（または大学院修士課程）における機能形態学、解剖生理学、生化学、分子生物学、構造生物学等の基礎知識を身につけていること。	近年の分子細胞生物学と構造生物学の進展により、各種疾患の分子病態が解明されてきた。治療薬の作用機構を理解するよりも分子病態の知識が必須である。本授業では、新しい新規薬剤を理解するために必要な分子細胞生物学的ならびに構造生物学的手法の理解を通して、主な疾患について最新の分子病態に関する知見を身につけることを目的とする。	分子細胞生物学および構造生物学に関する理解を強化し、種々の疾患の分子病態に関する学術論文を読解することができる。	担当：豊田	糖尿病１ 担当：豊田	糖・脂質代謝調節とその異常	担当：豊田	糖尿病２ 担当：豊田	肥満症の病態	担当：豊田	糖尿病３ 担当：豊田	糖・脂質代謝異常に関する文献紹介および討論１	担当：豊田	糖尿病４ 担当：豊田	糖・脂質代謝異常に関する文献紹介および討論２	担当：豊田	複合難質関連疾患１ 担当：山田（修）	複合難質および関連する疾患についての基礎	担当：山田（修）	複合難質関連疾患２ 担当：山田（修）	複合難質および関連する疾患について解析するための、分子生物学的および生化学的手法	担当：山田（修）	複合難質関連疾患３ 担当：山田（修）	複合難質に関連する疾患についての論文紹介および討論１	担当：早川	複合難質関連疾患４ 担当：山田（修）	複合難質に関連する疾患についての論文紹介および討論２	担当：早川	糖尿病５ 担当　早川	糖尿病に関する文献紹介および討論	担当：早川	内分泌疾患１ 担当：早川	甲状腺疾患の分子病態とそれに基づく治療戦略	内分泌疾患２ 担当：早川	副腎疾患の分子病態とそれに基づく治療戦略
2017	762001	医療情報科学特論	Advanced Health Care Information Science	大津　史子(OTSU　Fumiko),亀井　浩行(KAMEI　Hiroyuki),永松　正(NAGAMATSU　Tadashi),田辺　公一(TANABE Kouichi),半谷　眞七子(HANYA Manako)	薬学研究科薬学専攻博士課程（4年制）	前期	4.0	学部（または大学院修士課程）における薬物治療学、医薬品情報学、コミュニケーション学、医療制度論、臨床薬理学、医療経済学等の基礎知識を身につけていること。学習後は、それぞれの学習内容について、確実に振り返ること。	医薬品の適正使用、医療の質の向上に貢献できる研究能力を養成するために、医薬品や医療行為等に関する様々な医療情報の集積、有効性・安全性について治療学的、医療薬学的、医療経済学的な評価に関する専門的な知識と習得する。そのための医薬品情報学、医療経済学、臨床薬理学、医療コミュニケーション、医療倫理学、薬剤疫学、社会薬学の基礎と応用について包括的に講義する。	この分野の研究に必要な先端技術・専門知識を学ぶとともに、医薬品適正使用の方法論について講論し、先導的な研究を推進する基本についても理解を深める。	担当：半谷	医療コミュニケーション（Health communicatio)概論１	コミュニケーションの理論体系：医療コミュニケーションの定義とコミュニケーションと保健行動説明するための医療コミュニケーションモデルを概説する。	担当：半谷	医療コミュニケーションの評価・分析方法	担当：半谷	医療コミュニケーションで多用される背景理論、研究手法を概説する。	実証研究の紹介１	担当：半谷	会話分析の一つである Roter Method of Interaction Analysis Systemの理論的背景と分析方法を概説する。	実証研究の紹介２	担当：半谷	ナラティブ分析の理論的背景と分析方法を概説する。	対人コミュニケーション	担当：半谷	医療コミュニケーションの実践例の紹介と演習	精神疾患の基礎	担当：亀井	統合失調症及びうつ病を含む気分障害などの精神疾患の臨床症状の理解を深める。	精神疾患の問題点とその評価１	担当：亀井	代表的な精神疾患の症例1の問題点を把握するとともに、症例の症状や副作用についての評価を習得する。	精神疾患への対応１	担当：亀井	症例1に対して、実際に問診や初回インタビュー、服薬指導に関するロールプレイを行う。	精神疾患への対応２	担当：亀井	代表的な精神疾患の症例2の問題点を把握するとともに、症例の症状や副作用についての評価を習得する。	精神疾患への対応３	担当：亀井	症例2に対して、実際に問診や初回インタビュー、服薬指導に関するロールプレイを行う。	薬剤疫学（１）	担当：後藤	薬剤疫学（２）	担当：後藤	医薬品のベネフィット・リスクバランスの発展の歴史と事例を列挙し、説明する	ファーマコビジランスの発展の歴史と事例を列挙し、説明する	薬剤疫学（３）	担当：後藤	医薬品のベネフィット・リスクバランスと治 療リスク管理の概念について説明する
2017	762002	薬物治療科学特論	Advanced Pharmacotherapeutic Science	野田　幸裕(NODA　Yukihiro),能勢　充彦(NOSE　Mitsuhiko),平松　正行(HIRAMATSU　Masayuki),脇田　康志(WAKIDA Yasushi),小島　良二(KOJIMA　Ryoji),間宮　隆吉(MAMIYA Takayoshi)	薬学研究科薬学専攻博士課程（4年制）	前期	4.0	薬理学、疾患・治療学、生薬学、漢方医学、薬効評価学など、授業計画に記載されている関連科目について復習しておくこと。	疾病の治療とともに「育薬」に貢献できる研究能力を養成するために、医薬品や伝統薬が有する薬理作用を多面的な視野で解析・評価する実践的かつ専門的な知識を習得する。そこで、薬理学、疾患・治療学、生薬学、漢方医学、薬効評価学などについて受講者参加型のグループ討論や演習的な講義を交えながら投網的に学ぶ。以下に示す講義をオムニバス形式で行う。	疾病の治療とともに「育薬」に貢献できる研究能力を養成するために、医薬品や伝統薬が有する薬理作用を多面的な視野で解析・評価する実践的かつ専門的な知識を習得する。	担当：野田	神経精神薬理学概論１	精神疾患の発症機序や治療薬の作用機構について基礎・臨床研究面から概説。	担当：野田	神経精神薬理学概論２	分子標的治療の医薬開発における創薬研究と生物統計および高度なゲノム医療とがん研究の実践について（名大特論1）。	担当：野田	神経精神薬理学概論３	生体試料の遺伝子解析による研究手法論について概説。	担当：野田	神経精神薬理学概論４	生体試料を用いた遺伝子解析方法について概説・演習。	担当：野田	神経精神薬理学概論５	分子標的治療の医薬開発における創薬研究と生物統計および高度なゲノム医療とがん研究の実践について（名大特論2）。	担当：野田	生薬・漢方医薬学概論１	漢方医学概論と現代医療における役割や基礎、社会からの期待などについて概説する。	担当：能勢	生薬・漢方医薬学概論２	生薬に触れ、かつ漢方薬を調製することで、「くすり」としての伝統医薬品について体験する（実技）。	担当：能勢	生薬・漢方医薬学概論３	生薬・漢方方剤に関する研究方法論について詳述する（1）。	担当：能勢	生薬・漢方医薬学概論４	生薬・漢方方剤に関する研究方法論について詳述する（2）。	担当：能勢	生薬・漢方医薬学概論５	生薬・漢方方剤に関して、研究提案を試みる。	担当：能勢	循環器薬理学概論１	担当：脇田	動脈硬化疾患の発生機序と薬物治療のターゲットに関する分子病態的解析をもちいた講義（1）。到達目標：動脈硬化の病態を理解し、治療法を論理的に述べることができる。	循環器薬理学概論２	担当：脇田	不整脈の発生機序および電気生理学的観点からの治療の作用機序に関する講義（2）。到達目標：不整脈を理解し、その電気生理学的意味をふまえて治療法について述べることができる。
2017	763001	薬物動態科学特論	Advanced Pharmacokinetics and Drug Delivery Science	岡本　浩一(OKAMOTO　Hirokazu),丹羽　敏幸(NIWA　Toshiyuki),北垣　伸治(KITAGAKI Shinji),瀬井　雅行(NADAI　Masayuki),原　脩(HARA　Osamu),加藤　美紀(KATOH　Miki),坂井　健男(SAKAI　Takeo)	薬学研究科薬学専攻博士課程（4年制）	前期	4.0	物理化学、製剤学、薬物動態学、薬剤学、有機合成化学に関する基礎的知識を十分に習得しておくこと。	医薬品の有用性は薬物の薬理作用のみではなく、その体内動態（吸収・分布・代謝・排泄）、更にはそれを含有する製剤の特性によって影響を受ける。医薬品を適正に使用するためには、薬物および製剤の特性を深く理解し、患者個々の状態に応じて薬物の体内動態がどのように影響されるかを科学的に考慮したうえでの投与設計が必要である。また、育薬という側面からは、薬物の化学構造、物理化学的および体内動態学的特性、さらに医療ニーズを考慮	薬物動態科学では、薬物の化学的特性を理解し、体内動態を規定する生理的・生化学的要因を解明するとともに、薬物の体内動態を制御するためのDDSや、製剤技術の開発に関する研究を行い、医薬品の適正使用に貢献できることを目標とする。	担当：原	ホストとゲスト(1)	担当：原	ホストとゲスト(2)	担当：原	静的分子認識と動的分子認識（1）	担当：原	静的分子認識と動的分子認識（2）	担当：北垣	経口吸収と化学構造	担当：北垣	分布と化学構造	担当：北垣	代謝と化学構造	担当：北垣	排泄と化学構造	担当：坂井	化合物の合成戦略 (1)	担当：坂井	化合物の合成戦略 (2)	担当：坂井	最近の有機合成化学 (1)	担当：坂井	最近の有機合成化学 (2)
2017	763002	医療英語特論	Advanced Health-Care English	Mark Rebuck	薬学研究科薬学専攻博士課程（4年制）	集中	2.0	毎回、次の授業のための課題を示すので、予習をしてから授業に臨むこと。	Each week there are two ninety-minute lessons. The first lesson is on a medical-related topic. The second period is on some aspect of academic writing. A key feature of this course is the use of authentic media. There will be ample amounts of authentic listening using clips from medical podcasts from the BBC, ABC, NPR and other radio stations. Various online videos will also be used as teaching resources.	To become use your medical knowledge to discuss various issues. To improve your listening of real-life English speech. To appreciate the value of authentic media for learning about the world of medicine. Become familiar with the conventions of academic (particularly scientific) writing.	First week The statins controversy	Statins are one of the most prescribed drugs in the world; however, there is much controversy around their use. We will examine the reasons for this.	First week Academic writing	Overview of academic writing (including scientific writing	Second week Diabetes	Diabetes Latest research on causes and treatment (various AV resources)	Second week Academic/scientific Writing	Focus on academic writing: The abstract.	Third week: Drug interactions	Drug interactions: look at various drug interactions, with a focus on the effect of grapefruit on various medications	Academic/scientific Writing	Focus on academic writing: Academic style	Fourth week End-of-life care issues	Palliative care in the UK	Fourth week Academic/scientific Writing	Focus on academic writing: Summarizing and paraphrasing	Fifth week End-of-life care issues	Medication used in palliative care Controversial issue: assisted suicide	Fifth week Academic/scientific writing	Focus on academic writing:Cohesion and how to achieve it	Sixth week issues around disability	Prenatel testing: The new NIPT. Focus on Down's syndrome.	Sixth week Academic/scientific writing	The nuances of citation
2017	763050	臨床腫瘍学特論	Advanced Clinical Oncology	立松　三千子(TATEMATSU Michiko),粟山　郁人(TUKIYAMA Ikuto),岩田　広治(IWATA Hiroji),小倉　友二(OGURA Yuji),立花　弘之(TACHIBANA Hiroyuki),堀尾　芳嗣(HORIO Yoshitsugu),松尾恵太郎(MATSUO Keitaro),水野　伸匡(MIZUNO Nobumasa),室　圭(MURO Kei),山本　一仁(YAMAMOTO Kazuhito),若林　俊彦(WAKABAYASHI Toshihiko),筑紫　聡(TSUKUSHI Satoshi),水野　美香(MIZUNO Mika)	薬学研究科薬学専攻博士課程（4年制）	後期	2.0	事前学習として、各「診療科ガイドライン」や「新臨床腫瘍学」、「がん診療レジデントマニュアル」等でがん治療の流れ、標準療法について学んでいること。また、事後学習としては、実際の医療現場において、得られた知識を生かした服薬指導、処方提案などを積極的に行うこと。	臨床現場においては、薬学的専門知識を活用して治療計画へ参画し、医療チームの一員として活躍することのできる臨床薬剤師が求められている。毎年、分子標的治療薬や様々な抗がん剤が登場し、がん治療の選択肢は増え続けているが、それに伴い、レジメンも増え、治療内容も複雑化している。それらに対応するため、各種がんの臨床について、それぞれの専門家による講義を受講することで最新かつ高度な知識を習得させる。	最新のがん治療の知識を持ち、臨床現場で活かすことができる。また、自らが臨床研究を行ったり、最新の知識を得るために学術論文を読解することができる。	担当：堀尾芳嗣	泌尿器がん	担当：小倉友二	泌尿器がんの診断と治療	担当：堀尾芳嗣	骨軟部腫瘍の診断と治療	担当：筑紫聡	腫瘍生物学	担当：堀尾芳嗣	腫瘍生物学の基礎	担当：室　圭	肺がん	担当：堀尾芳嗣	肺がんの診断と治療	担当：松尾恵太郎	がんの疫学	担当：松尾恵太郎	がん統計の基礎と解説	担当：松尾恵太郎	医療統計学	担当：松尾恵太郎	医療統計の基礎と解説	担当：松尾恵太郎	大腸がん	担当：室　圭	大腸がんの診断と治療	担当：室　圭	胃がん・食道がん	担当：室　圭	胃がん・食道がんの診断と治療	担当：室　圭	婦人科がん	担当：水野美香	婦人科がんの診断と治療	担当：水野美香	乳がん	担当：岩田広治	乳がんの診断と治療	担当：岩田広治	脳腫瘍	担当：若林俊彦	脳腫瘍の診断と治療	担当：若林俊彦	血液がん（１）	担当：山本一仁	白血病の診断と治療	担当：山本一仁
2017	761005	基礎薬学特論	Introduction to Advanced Pharmaceutical Sciences	丹羽　敏幸(NIWA Toshiyuki),井藤　千裕(ITO Chihiro),金田　典雄(KANEDA Norio),亀井　浩行(KAMEI Hiroyuki),北垣　伸治(KITAGAKI Shin),神野　透人(JINNO Hideto),瀬井　雅行(NADAI　Masayuki),二改　俊章(NIKAI　Toshiaki),野田　幸裕(NODA　Yukihiro),湯川　和典(YUKAWA　Kazunori),脇田　康志(WAKIDA Yasushi),大津　史子(OTSU　Fumiko),能勢　充彦(NOSE　Mitsuhiko),山田　修平(YAMADA Shuhei)	薬学研究科薬学専攻博士課程（4年制）	前期	2.0	有機化学、生化学、微生物学、衛生科学、生薬学、物理化学、薬理学、製剤学、薬物動態学、医薬品情報学など、授業計画に記載されている関連科目について復習しておくこと。	薬学研究者として、人類の健康維持・増進のための薬学領域における学術の高度化に貢献するためには、特定領域の専門性を深めるだけでなく、薬学分野全般に関する広い学識を持つことが望まれる。そのために、候補化合物の探索・分子設計手法、化合物の薬理作用・毒性、環境化学物質と生体の関わり、薬物の体内動態の特徴と評価手法、薬物治療の最適化に向けた製剤設計と製剤化技術などについて、基礎事項を中心に包括的に講義する。	薬学研究科で教育・研究指導を受けるために必要な薬学の知識を身につけ、薬学・医療に関する専門的な講義、論文、議論を理解することができる。	担当：神野	環境衛生科学１	化学物質と健康	担当：二改	環境衛生科学２	薬学領域における基礎微生物学	担当：井藤	環境衛生科学３	天然からの医薬品	担当：後藤	医療情報科学１	医薬品情報概論	担当：亀井	医療情報科学２	精神疾患における薬物治療	担当：大津	医療情報科学３	医薬品副作用の考え方	担当：山田	病態解析科学１	薬学における生化学	担当：金田	病態解析科学２	薬学における分子生物学的研究手法	担当：湯川	病態解析科学３	薬学と病態生理研究	担当：能勢	薬物治療科学１	生薬および漢方方剤の基礎と薬物治療における役割	担当：野田	薬物治療科学２	化合物の構造および薬理作用に 基づいた薬効と副作用	担当：脇田	薬物治療科学３	循環器治療薬の病態生理に基づいた作用機序と、未来の治療ターゲット

授業内容-【項目番】	授業内容-【内容欄】	授業内容-【項目番】	授業内容-【内容欄】	授業内容-【項目番】	授業内容-【内容欄】	授業内容-【項目番】	授業内容-【内容欄】	授業内容-【項目番】	授業内容-【内容欄】	授業内容-【項目番】	授業内容-【内容欄】	授業内容-【項目番】	授業内容-【内容欄】	授業内容-【項目番】	授業内容-【内容欄】	授業内容-【項目番】	授業内容-【内容欄】	授業内容-【項目番】	授業内容-【内容欄】	授業内容-【項目番】	授業内容-【内容欄】	授業内容-【項目番】	授業内容-【内容欄】	授業内容-【項目番】	授業内容-【内容欄】	授業内容-【項目番】	授業内容-【内容欄】	授業内容-【項目番】	授業内容-【内容欄】	授業内容-【項目番】	授業内容-【内容欄】	授業形態・方法	成績評価方法及び評価基準	その他（履修条件・関連科目など）
担当：二改	蛇毒研究の歴史 毒蛇の分類・咬傷・処置・抗毒素治療	担当：二改	毒蛇の分類・咬傷・処置・抗毒素治療 蛇毒生理活性物質の探索と医薬品としての展望	担当：二改	蛇毒生理活性物質の探索と医薬品としての展望	担当：打矢	外敵（病原微生物、がん細胞、ストレス等）から身を守る生体防御（免疫）システム（Ⅰ）	担当：打矢	外敵（病原微生物、がん細胞、ストレス等）から身を守る生体防御（免疫）システム（Ⅱ）	担当：打矢	病原微生物（ヤルモネラ菌）の感染メカニズム（Ⅰ）	担当：打矢	病原微生物（非結核性抗酸菌や結核菌）の感染メカニズム（Ⅱ）	担当：打矢	病原微生物（インフルエンザウイルス等）の感染メカニズム（Ⅲ）	担当：二改	アスベルギルス属の産生するエラスターゼの構製、生物学的性質及び病原性	担当：二改	アスベルギルス属の産生するエラスターゼ阻害因子の精製、生物学的性質及び治療薬としての可能性	担当：小森	ワクチンに関する諸問題(1) 現在使用されているワクチンと各国の予防接種制度	担当：小森	ワクチンに関する諸問題(2) 今後導入されるワクチン、現在開発中のワクチン	担当：小森	最近話題となった感染症について、感染症に関する情報の入手	担当：神野	環境化学物質・金属の生体影響－感受性個体差の分子機構	担当：神野	環境化学物質・金属の生体影響－内分泌撹乱作用機構機構と遺伝子損傷機構	担当：神野	幹細胞を用いた化学発がん・分化異常の分子機構	担当：神野	環境化学物質の曝的としてのイオンチャネル型受容体(I)	担当：神野	環境化学物質の曝的としてのイオンチャネル型受容体(II)	講義を中心に、レポート、発表、討論など多様な形態、方法も取り入れて理解を深める。	講義に対する理解を計るために、レポート内容や課題に対するプレゼンテーション、質疑応答などの各局面で、大学院生としての資質・能力の成長・レベルを評価する。	特に限定しないが、広い視野で関連分野領域を含めて理解を深めてほしい
構造生物学１担当：菜本	分子病態解明のための構造生物学の基礎	構造生物学２担当：菜本	分子病態解明における構造生物学の応用	エピジェネティクな遺伝子発現と疾患１　担当：村田	エピジェネティックな遺伝子発現のメカニズム	エピジェネティクな遺伝子発現と疾患２　担当：村田	エピジェネティクな遺伝子発現の基礎にもとづく疾患	構造生物学３担当：菜本		分子病態解明における構造生物学の応用に関する論文紹介および討論1	エピジェネティクな遺伝子発現と疾患３　担当：村田	エピジェネティックな遺伝子発現に関する論文紹介と討論1	免疫疾患１担当：湯川	精神疾患と免疫疾患の分子病態、論文発表用の論文配付、配付論文読解のポイント解説	免疫疾患２担当：湯川	1型糖尿病の分子病態	免疫疾患３担当：湯川	疾患モデルを用いる病態研究	免疫疾患４担当：湯川	精神疾患と免疫疾患の分子病態に関する論文紹介と討論1	神経変性疾患１　担当：金田	パーキンソン病の分子病態	神経変性疾患２　担当：金田	アルツハイマー病の分子病態	in silico創薬１担当：小田	分子病態を疾病治療につなげるためのin silico創薬の概説	in silico創薬２担当：小田	Structure-based drug designとligand-based drug design	神経変性疾患３　担当：金田	神経変性疾患の分子病態に関する論文紹介および討論1	神経変性疾患４　担当：金田	神経変性疾患に関する論文紹介および討論2	in silico創薬３担当：小田	実際のin silico創薬	in silico創薬４担当：小田	in silico創薬に関する論文紹介と討論1	各分野に高い専門性を有する複数の教員によるオムニバス形式の講義を中心に、最新の知見について学ぶ。さらに自己学習を促進するため、２～３グループに分かれて学術論文の読解を課し、院生による内容紹介と討議を行う。	全講義数の２/３以上の出席者を評価対象とする。評価基準は論文紹介の内容と討議（６０点）ならびに提出物（４０点）の合計が６０点以上を合格とする。	特になし。
薬剤疫学（３）担当：後藤	安全性データの情報源の法について説明する	薬剤疫学（４）担当：後藤	効率よく安全性情報を収集できる。リスク最小化方策について説明する	薬剤疫学（５）担当：後藤	汎用される疫学的評価指標について説明する	適正使用を推進するための情報評価（１）担当：大津	適正使用を推進するための情報評価（２）担当：大津	適正使用を推進するための情報評価（３）担当：大津	課題（ベネフィット・リスクが問題となった事例）を解決するために文献検索を行い、必要な論文を選択できる。	適正使用を推進するための情報評価（３）担当：大津	課題を解決するために重要な論文を批判的に吟味する。	適正使用を推進するための情報評価（４）担当：大津	批判的に吟味し、整理した論文を基に与えられた課題について総合的に評価できる。	適正使用を推進するための情報評価（５）担当：大津	評価結果に基づき安全対策に関する行動計画をそれぞれの立場で立案できる。立案した行動計画について、それぞれの立場でディベートを行い、最善の行動計画としてまとめる。	研究デザインと統計解析１担当：田辺	臨床現場で遭遇する臨床疑問を解決するために、よく用いられる研究と臨床疑問の「型」について概説する。（以下、基礎統計学の範囲は理解しているという前提で講義を行うので、不安がある場合は予めテキ	研究デザイン２と統計解析２担当：田辺	臨床疑問の「型」に沿った研究デザインの方法を学ぶ。また、研究デザインの時点で研究計画に織り込んでおくべき交絡の制御方法、サンプルサイズの見積り方法、アウトカム設定上の注意等につい	研究デザインと統計解析３担当：田辺	様々な研究手法・統計解析法（特に、探索的手法・構成概念など）について学ぶ。	研究デザインと統計解析４担当：田辺	様々な研究手法・統計解析法（質問紙法、尺度開発法など）について学ぶ。	研究デザインと統計解析５担当：田辺	量的研究法と質的研究法、およびこれらの混合研究法について実例を見ながら学ぶ。最後に、研究デザインと統計解析１～５のまとめと振り返りを行う。	薬理生物学の研究デザインと結果の解釈１担当：永松	「糖尿病性腎症の発症と進展」の研究について、どのように研究を進めたのかの解説（１）	薬理生物学の研究デザインと結果の解釈２担当：永松	「糖尿病性腎症の発症と進展」の研究について、どのように研究を進めたのかの解説（２）	薬理生物学の研究デザインと結果の解釈３担当：永松	研究についての方法論、ウエットの実験の考え方を解説し、議論する。	薬理生物学の研究デザインと結果の解釈４担当：永松	"シムマンによる薬物作用のモニタリング 自律神経作用薬と循環器のバイタルサイン（１）演習と討論（２）自律神経系の復習	薬理生物学の研究デザインと結果の解釈５担当：永松	"シムマンによる薬物作用のモニタリング アナフィラキシーショック患者の救命方法を学ぶ（２）演習と討論		受講態度、発表態度などで評価する。	特に限定しないが、関連分野も含め大局的に理解を深めてほしい。
循環器薬理学概論3 担当：脇田	心機能評価法と心不全の発生機序および治療薬の作用機序に関する講義（２）。到達目標：心機能評価法を理解し、心不全の病態を把握したうえで、治療法について述べることができる。	循環器薬理学概論4 担当：脇田	高血圧症の分子病態学と治療薬理学に関する解説講義（４）到達目標：高血圧の病態生理を理解したうえで、治療法を述べることができる。	循環器薬理学概論5 担当：脇田	臨床研究における統計解析法の要点と落とし穴に関する講義（５）。到達目標：論文を批判的に読める。	生体機能制御学概論1 担当：平松	学習・記憶障害やその治療薬について概説するとともに、その研究・解析手法について概説（１）。	生体機能制御学概論2 担当：平松	学習・記憶障害やその治療薬について概説するとともに、その研究・解析手法について概説・演習（２）。	生体機能制御学概論3 担当：平松	ストレス性疾患やその治療薬について概説するとともに、その研究・解析手法について概説。	生体機能制御学概論4 担当：平松	基礎研究における統計解析法とその応用（PCを用いた概説・演習）（１）。	生体機能制御学概論5 担当：平松	基礎研究における統計解析法とその応用（PCを用いた概説・演習）（２）。	神経科学概論1 担当：間宮	ストレスによる神経機能障害および末梢機能障害について概説する。	神経科学概論2 担当：間宮	ストレスによる神経機能障害および末梢機能障害の小動物を用いた評価方法について概説する。	神経科学概論3 担当：間宮	時間薬理学および時間治療学の概念と最新の研究成果について概説する。	神経科学概論4 担当：間宮	時間薬理学および時間治療学の概念と最新の研究成果について概説しながら、聞違する評価方法を概説する。	神経科学概論5 担当：間宮	神経科学分野における動物実験の現状を紹介し、理想的な研究のあり方を考える。	分子細胞薬理学概論1 担当：小島	iPS細胞/ES細胞/幹細胞の医療応用について概説する。	分子細胞薬理学概論2 担当：小島	細胞のストレス応答の分子機構について概説する (1)	分子細胞薬理学概論3 担当：小島	細胞のストレス応答の分子機構について概説する (2)	分子細胞薬理学概論4 担当：小島	分子・細胞生物学的方法論について概説・演習 (1)	分子細胞薬理学概論5 担当：小島	分子・細胞生物学的方法論について概説・演習 (2)	オムニバス方式・講義／演習／名古屋大学大学院医学研究科開講科目など	小テスト・レポート（100%）。各担当者が講義内容の理解度を確認する。出席は加点要素とはしないが、3分の1以上欠席した場合は欠格とする。	名古屋大学大学院医学研究科開講講義・演習など
担当：丹羽	製品化戦略と付加価値製剤（1）	担当：丹羽	製品化戦略と付加価値製剤（2）	担当：丹羽	製剤開発の潮流と展望（1）	担当：丹羽	製剤開発の潮流と展望（2）	担当：岡本	吸入剤評価法(1)：吸入剤評価法の理論と手法について講義する。	担当：岡本	吸入剤評価法(2)：吸入剤評価法の理論と手法について講義する。	担当：岡本	吸入剤評価法(3)：吸入剤評価法(TSI)を実際に体験する。	担当：岡本	吸入剤評価法(4)：吸入剤評価法(ACI)を実際に体験する。	担当：灘井	薬物体内動態とトランスポーター（1）	担当：灘井	薬物体内動態とトランスポーター（2）	担当：灘井	病態および薬物相互作用による薬物体内動態の変化（1）	担当：灘井	病態および薬物相互作用による薬物体内動態の変化（2）	担当：加藤	薬物代謝酵素とトランスポーター(1)	担当：加藤	薬物代謝酵素とトランスポーター(2)	担当：加藤	薬物代謝やトランスポーターを介した薬物相互作用による薬物動態の変動 (1)	担当：加藤	薬物代謝やトランスポーターを介した薬物相互作用による薬物動態の変動 (2)	担当：丹羽	製剤化装置と技術の体験学習	担当：岡本	最近のDDS製剤：新しいDDS製剤について講義する。	複数の教員によるオムニバス形式の講義を中心に、発表、討論、演習等の講義形態も取り入れて、理解を深める。	レポート、発表、討論、演習の成果や貢献応答の内容などから、大学院生としての能力を総合的に評価する。	薬物動態科学特殊研究Ⅰ～Ⅳを履修する。また、名古屋大学大学院医学系研究科開講講義・演習等を必要に応じて受講する。
Seventh week Smoking in the UK	The medical harm of smoking. The history of smoking in the UK. Smoking bans.	Seventh week Academic/scientific writing	Focus on academic writing: logical fallacies Focus on academic writing: The nuances of citation	Eighth week Parkinson's Disease	Drugs to treat Parkinson's Disease. The doctor who make L-dopa famous																													少人数のクラスとなる予定のため参加型でグループワークを用いた授業となる。Handouts will be provided each lesson.	Students will be assessed on their participation in class. A few short assignments may be set.	Graduate students who join this class will have different backgrounds. Some will be involved in research, while others may be working in a hospital or pharmaceutical company. As well as improving your English language skills with the help of a native English speaker, you can also learn a lot from each other.
血液がん（２）担当：山本一仁	悪性リンパ腫・多発性骨髄腫の診断と治療	胆道がん・膵臓がん担当：水野伸匡	胆道がん・膵臓がんの診断と治療	放射線腫瘍学担当：立花弘之	がんの放射線治療の理論と治療																													各分野の専門家によるオムニバス形式の講義を行う。	全講義数の２/３以上の出席者を評価対象とする。評価基準は、聴講態度、各講義における質問回数と質問内容等により、事前学習の成果と合わせ、総合的に評価する。	特になし
薬物動態科学１担当：灘井	薬物体内動態の基礎と薬物治療への応用	薬物動態科学２担当：北垣	代謝の基礎となる有機化学	薬物動態科学３担当：丹羽	製剤設計-くすりを使いやすく効率よく効かすためのエ夫-																													５つの専修分野（環境衛生科学、医療情報科学、病態解析科学、薬物治療科学、薬物動態科学）の教員各３名が講義する。	専修分野ごとに、出席状況、レポート、試験等により成績を評価し、５つの専修分野の成績を総合的に判断する。	非薬学系出身者は本科目を必ず受講すること。薬学系出身者も履修することができる。